

第5章 RAAのリソースを応用した異文化間の関係づくり

——ビーレフェルト市S保育施設の事例から——

移民家庭に対する教育支援の中で、移民がドイツ社会とのつながりや社会参加を意識する機会がある。ドイツ社会とのつながりや社会参加と言ったとき、その一步となるのは、移民にとってまず身近な生活空間における参加から始まる。それには、そこに存在する移民とドイツ人との関係性が大きく関わる。この関係性に焦点化して、ビーレフェルト市S保育施設におけるパイロット・プロジェクトを事例として取り上げることにした。このプロジェクトは、その実施に至るまでに、RAA本部や他都市のRAAの活動をリソースにプロジェクトの方向性を検討した。本章では、まず、このパイロット・プロジェクトがRAAのどのようなリソースを参照し、ビーレフェルト市の実態に応じて応用したのかという点を整理する。そして、S保育施設において子どもと言語能力促進をきっかけに始められた親への対応に焦点化し、移民の親、特にトルコ系移民の母親とドイツ人の母親、ドイツ人保育者との間の関係性について述べていきたい。

1 RAAによる就学前の移民の子どもと母親支援

前章で述べてきたように、RAAビーレフェルトの教育支援活動は初等教育、前期中等教育段階における支援に集中していた。しかし、二〇〇〇年以降、ドイツ教育界では、就学前教育における移民の子どものドイツ語能力促

進が盛んに議論されており、それらについては、R A Aビーレフェルトでは対応できていなかった。そのようなか、ビーレフェルト市において移民支援に関わる組織の中でも、当市の政策決定にも影響を及ぼすようなイニシアチブ・グループ「プロ・ビーレフェルト (Pro Bielefeld)」が、就学前の移民の子どものドイツ語教育とその親への支援に取り組むことになった。

このグループが就学前教育における移民家庭に対する支援に焦点化し、プロジェクト導入を検討していた二〇〇一年には、当市に在住する外国籍の子どもや青少年は約一万人で、これは当時の市全体の一八歳未満人口の約五分の一に相当した。これに現れるように、当市の多文化化が今後さらに進捗することは明らかであり、それを考慮したうえで、このグループは当市の移民の統合や移民と地域住民の関係構築に関わる支援を模索していた。当市の青少年人口における外国籍者の割合が高いことを勘案すると、このグループの活動の焦点が教育へと向かうのは当然であった。教育のなかでもどこに焦点化して支援活動を展開するのか検討する際に、行政や移民支援関係者、教育関係者からなるワーキング・グループをイニシアチブ・グループ内に設置し、検討を重ねた。その結果、移民の統合促進には、ドイツ語能力が重要な鍵となっていることから、可能な限り幼いうちからドイツ語能力の促進を図る取り組みが必要であると意見が一致した。

ワーキング・グループのメンバーであり、当市の異文化間事務所の責任者であるG氏(ドイツ人)は、パイロット・プロジェクトを試行する場として、当市南部の特にトルコ系移民の集住地域にあるS保育施設を提案した。この保育施設の責任者H氏(ドイツ人)がパイロット・プロジェクト実施を了承し、彼女や保育者、当市の就学前教育担当部局のスタッフとワーキング・グループのメンバーが、ともにプロジェクトの基本方針を検討することになった。就学前の子どものドイツ語能力促進においては、母語を基礎とした第二言語獲得を目指すプログラムがドイツ国内で広く行われるようになっていた。これには、子どもの言語獲得に関する親の理解が必要不可欠であり、プ

プロジェクトの実施には、移民の親、とりわけ母親をプロジェクトに取り込むべきであるとG氏は主張した。こうした主張の背景には、家庭内に留まる傾向のある移民の母親を孤立から脱却させ、エンパワメントすることにより、家庭の中での移民女性の自己意識や態度の変化につながる影響をもたらすのではないかという考えがあった (Beirat des Projekts 2001: 3)。

この考えに基づき、プロジェクトのコンセプトを作り上げる際に参考としたのが、RAA本部が開発し、その普及を進めていた「リュックサック・プロジェクト (Rucksack Projekt)」のプログラムとRAAデューレン (RAA Düren) のスタッフによる『私たちはよく理解し合っています (Wir verstehen uns gut)』という就学前言語教育のテキストであった。ワーキング・グループのメンバーとH氏は、主としてこの二つをリソースとし、プロジェクトの基本方針を固めていった。

では、リソースとして参照されたそれぞれの内容を概観しておこう。

(1) リュックサック・プログラム

このプログラムは、NRW州が一九九九年から二〇〇二年の間、RAAを助成し、開発を促したものである。これは、第一言語のよりよい獲得が第二言語習得の基礎になるというバイリンガル教育の理論に基づいたものである。就学前教育施設と移民の母親が協力することで、子どもの母語とドイツ語の言語獲得と年齢に応じた子どもの発達そのものを促すことを目指している。その際、母親は子どもの母語獲得のための重要な存在と見なされる。これまで、家庭の言語環境が非ドイツ語であることが、移民の子どもにとってドイツ語の「欠損」として捉えられ、母語が軽視されてきたが、このプログラムはそうした捉え方をしていない。バイリンガル教育の理論に基づき、移民の子どもの母語を肯定的に捉え、その獲得を促すことで、ドイツ語獲得を促す利点へと転じさせようとし